
蚩樹

AKIRA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蛍樹

【Nコード】

N3447A

【作者名】

AKIRA

【あらすじ】

現在、過去、未来を繋ぐ鍵は、「楽譜」。一人の青年の人生と、歴史上名前すら残っていない音楽家の物語。

一楽章 出会い

〔序楽章〕

人間は、一人では生きて行けない生き物だと誰かが言った。

「生きる」ということそれは、家族であつたり、友人であつたり、恋人であつたり誰かの支えがあつてこそ、生きていけるのではないかと思う。そしてもう一つ、その人が持っている才能、もしくは実力などを、引き出す力の根源は「支え」であると信じたい。

「生きる」〃「才能を開花させること」なのかもしれない。

僕の昔の考えは、自分の人生だ、生きたい様に生きて悔いがなければそれで構わないのではないか？そう考えていた。

しかし僕は一人の女性と知り合い、その人を取り巻くオーラに魅了され、いつしか恋に落ち、いつしか僕の考えが大きく変わっていった……。

一楽章 ー 出会い

「結婚おめでとう、乾杯」一斉にグラスを重ねる音が耳に届いた。

僕はパーティ会場の入り口に辿り着いたばかりだった。「本日は会費制になっております、台帳に名前と住所をご記入下さい」

僕の前に、2人の女性がいて係りの人の指示通り、順番に記入を行ったのち、一礼し、祝儀袋を手渡している。僕は自分の順番が来るまで、周りを見渡していた。

「須賀君？」後ろから声を掛けられ反射的に振り向く。

「須賀 潤一郎さん？」声を掛けてきたのは子供を抱えている女性で、僕は瞬間的に眉間にしわをよせる。

眉間にしわをよせるのは、僕の考える時の癖で、癖がでてしまった事に気づき、すぐに元に戻した。「お久しぶり、元気だった？ 海

外に行つたつきり音沙汰無いんだもん。その様子じゃ私のこと忘れてるな？ 私よ私、知美」言われたが瞬間的には、良く思い出せない。

「知美、知美？」名前を何度か口にし、眉間にしわをよせ、記憶を辿る、ふと一つの名前に行き着いた。とっさに名前を口にする。

「菅原 知美！！」。

「ピンポン、やっと思い出したみたいだね。私を忘れているなんて、このふとどきもの」

そう言いながら微笑む。浮かべた微笑と同時に瞬間的に学生時代の知美と目の前に立っている知美が重なる。

「なに、ボーっとしてるの、潤一郎君。私に子供がいるのにそんなにビックリした？もう少して1歳の、由佳です」そう言つて赤ん坊をこちらに向ける。

「抱いてみる？おとなしいから大丈夫よ」そう言つて半ば強制的に子供を渡された。こういう強引さは昔から変わってない所である。

「はい、潤一郎おじちゃんに抱かれて、よかったでちゅね」

「おじちゃんはよけい」そう笑顔で言いながらも赤ん坊の暖かさや重みに心が落ち着き安らぐ。

「赤ん坊抱いてると、本当のパパみたいよ」そう言いながら、知美も微笑む。

「そうそう、夏美は今日、潤一郎君来るの知ってるの？」

「いや、知らない、智一からメール届いたから、いろいろ考えたけど・・・、今日は会わずに記帳して会場を後にする予定だったから・・・」

「智一には会つたの？」

「いや、会っていない」そう言つて視線を会場の入り口へと移す。

「平田 智一 夏美 夫妻 パーティ会場」その看板の文字のみが華やかに輝いていた・・・。

月日が経つのは早いもので僕が日本を離れて、あの時より5年の歳月が経っていた。

大学時代、ある時、大学教授に呼ばれた。教授の話によると、「現代における若き才能者を発掘する一環で、3校（本校S校と、隣町のR校とA校）合同のピアノコンクールが開催される、そのコンクールを須賀君受けてみないか？との申し出であった。

各校2名の選拔を行い計6名の中から、実力者1名を決定する。私は推薦枠を持っている権限により、君をぜひとも推薦したい。」との話しだった。

「このコンクールで実績を残せた暁には大学の援助で海外での活動が約束される、須賀君、君の実力を試してみないか？」そう主張するものだった。

その問いかけに僕は、少し考える時間が欲しいと回答をした。

「大学側の主張も分かる、もし仮に、賞を取ることが出来たら大学の名も上がるし、生徒も今より増えると思う、学費免除でピアノに没頭させてくれたことに対しては大学側に本当に感謝してる、でも海外に行くとなると夏美に……」ここまで言って智一が口を挟む。

少し飲み過ぎた様で智一の顔が赤い。相談したいことがあると持ちかけると、「軽く飲みながら話そう」ということになった。最近出来たばかりの店らしく「ラ・ジェルド」と看板が掲げられていた。週末でもあり若者が溢れている。ジャズが心地よく流れており、落ち着ける空間である。「いい店だろ？この前ここがオープンの時、バイトで俺が演奏したんだ」テーブルを鍵盤に見立てて指を軽やかに動かす。「この店での演奏が俺にとっての最後の演奏……」。少し寂しげな表情で指を動かす。

就職活動の時期になると、親との約束だと言って音楽から離れることを決心したと言う。いつだったかこんな話を聞いた。

「大学入学の時に約束したんだ、決して実家は金持ちではないし、一度でもコンクールで賞を取ることが出来れば続けてもよい、しか

し賞が取れない様ならば、全てを捨てて就職する様にと・・・」。
ふと思い返してしていると、僕の携帯が鳴った。液晶に夏美の文字が浮かぶ。

「もしもし、潤一郎。今、何処にいるの？」

「智一と一緒に飲んでる「ラ・ジエルド」って言う店」

「そうなんだ、ちよつと話したかったんだけど、今から会えないかな？」

「別にいいけど、なんなら、今から夏美ここに来る？」

「いや、バイト終わったばかりで、ちよつと疲れてるから、30分後ぐらいに家に行つていいかな？ そっちの方が落ち着くし」

「分かった、じゃあ30分後に」そう言つて電話を切った。

「夏美ちゃん何て？」

「話があるんだつて、そんで家に来るらしい」。

結局続きを啓一に話す前に本人に会わなくてはならなくなった。

智一と別れの間際「まずは、良く考えて自分自身の気持ちを正直に話すことが大切なんじゃない？ 夏美ちゃんなら理解してくれると思うよ」その言葉が今でも心に引っかかっている。どうして、あの時、僕は正直に気持ちを伝えずに、自分一人で答えを出してしまったのだろう・・・。

家へと着くと夏美は玄関先に座り込んでいた。

「ただいま、ごめん待った？」

「今さつき着いたとこ、とりあえず中に入つていい？」

「ああ、散らかつてるけど」そう言つて夏美を招き入れた。

「コーヒー入れるからそこら辺、座つといて」台所へ立つてコーヒーを入れる準備をしながら、台所から声を掛ける。

「話したい事つて何？」

「後で話す」嬉しそうな声が耳に届いて来た。

「はい、お待ちどうさま、今日はご機嫌だね。何、早く教えてよ」
「えっと、就職が無事に決まりました」
笑顔で微笑むその姿は今でも心に刻まれている。

夏美と出会ったのは、大学2年生の時、学園祭が開催されると聞き、夏美の通う大学に友人数人で出向いたときの事だった。

「知ってた？この大学って昔は音大だったんだって、どうい
きさつで音大じゃなくなったのは詳しくは分かんないけど、今は福
祉学科専門の学校だけだね」構内を歩きながら友人達の話に耳だけ
を傾けていた。

歩き辛さに気が付き、左足を見ると靴紐がほどけており、その場に
しゃがみ込み靴紐を結び直すことにした。

すると何処からか聞きなれないフレーズが僕の耳に届いた。耳を澄
まして音に集中する。

勢い良く音符が舞ったと思ったのち、たどたどしく曲が詰まる。

前を歩く友人達は右に曲がるが、気が付くと僕はピアノの音に導か
れて友人達とは逆の左へと自然と曲がっていた。

一步、一步、進んで行くうち、面白い曲、”不思議な響きのフレー
ズ”に心を動かされ、自然に曲の続きを確かめたいという衝動が、
僕の心の中に沸き起こっていた。

薄暗い場所へ辿り着き、目を凝らして周りを見るが、今は、ほとん
ど使われていないようである。

音の根源へと歩みを速める。

ドアの上に半分消えかかった文字で「資料室」と書かれている。
音の発生地へと辿り着きドアを右へとスライドさせた。開け放たれ

た窓からは心地良い風と共に光が差し込んでいる。こちらからは逆光で眩しく、顔がはつきり見えない。息づかい、鍵盤を弾くタッチから演奏者は女性であると思われる。曲に没頭しているのか、僕が入って来たのに気付いてない様子で、演奏を続けている。声を掛け辛くしばらくの間、このままで待つことにした。開け放たれた窓から突如、風が舞い込み風に乗って一枚の楽譜が僕の足元に舞い降りた。

「あつ」その人は僕にやつと気が付き声を漏らした。澄んだ透明感のある声でやはり女性だと分かった。

「すいません、ピアノの音が聞こえたものですから、勝手に入ってしまった」

答えながら楽譜を渡そうと歩み出す。

「いえ。気にしないで下さい。趣味で弾いているだけです。私の方こそ、誰かに聴かせたこと無いものですから、下手ですいません。何か恥ずかしいな」

少しずつ目が慣れて輪郭が浮かび上がる。

「ここ光が強くて眩しいでしょ。ちょっと待ってて下さいね。今カーテンしますから」

そう言つてカーテンを引いてくれた。室内に注がれていた光が一気に遮断され一瞬目が眩んだ。

目が室内に慣れ、その人を見ての第一印象は、人を引き込む不思議なオーラを持つている人だと思つた。目には見えない不思議なオーラを何人の人が見極めることが出来るのだろうか？ふとそんなことが頭に浮かんだ。女性の魅力とはもしかしたら、オーラそのものであり、オーラに魅了されし者が、自然と恋に落ちるのかもしれない・・・。

自然と話している自分にちよつとビックリしたのも事実である（初対面では上手く喋ることが出来ないのだが・・・）。楽譜を渡そうと譜面に目を落とす。

「誰の曲なんですか？」

「今弾いていたのは、歴史上に名前を残すことのなかった人の曲です」

「歴史上に名前を残すことのなかった人……？」

「そう、レラ『シロスです』小さく呟く。

そしてこの出会いこそが、僕の人生を大きく変えることになる『レラ』シロス』との出会い、『夏美』との出会いだった。

「それじゃ、知美そろそろ空港に向かうよ」そう言つて由香ちゃんを優しく手渡す。

「こんな所で会えるとは思つてなかったから会えて、すごく嬉しかったよ。あと皆によろしく伝えといて、すぐに向こうに帰らないといけなくて、ゆっくり出来ない事が残念だけど……。夏美と智一に、結婚おめでとうつて伝えといて、それじゃいつかまた……。」
由佳ちゃんの頭を撫でて「それじゃまたね」そっくり残し、僕は入り口へと向かつて歩きだした。知美とすれ違い様。知美がふと呟く。
「あの時の決断は今でも間違つていないの？」

歩みを止めることなく、振り返ることなく、僕はただ一言。

「ああ」としか呟くことしか出来なかった。

二楽章 旅立ち

2楽章 旅立ち

「パタン」パーティ会場の扉が閉まる気配を背中を感じる。

「あの時の・・・」扉を背にし知美の言葉が頭の中を駆け巡る・・・。

雲一つ無い、快晴の青空を見上げたのち、少し重たい足取りの一步を踏み出した。

とつさに知美に「空港」と言い会場を後にしたが、僕に今、帰る場所など本当はもう無い。歩いている途中、会場の扉が開いた感じがして、瞬時に振り返る。

突如視界が急に暗くなり、会場の扉を覆い隠す様に僕の目の前に、一人の老人が立ちはだかる。辺りは一瞬で暗闇と化した。

「そろそろ時間じゃ・・・。どうする若者よ？ 現に淡く光っている、ほれごらんさい。過去の時より現在に持ってきた、そのものが残りわずかな時を告げておる、あまり時間がないぞい」。そう言いながら胸元を指差す。僕は服の中からその物を取り出し視線をチエーンに通した指輪へと落とした。右手の手のひらへ指輪をそっと乗せる。青白い光りを放っている。

「さあ、それをどうする。彼女に渡すか？これがたぶん、最後のチャンスじゃ、彼女に渡す他に、おぬしが転生する方法はないのじゃ。辛いじゃろうが・・・」悲しそうな表情で僕を見つめる。

多分、この老人は誰よりも一番僕の心を理解してくれてくれるのだらう。

そう、彼と共に、過去と一緒に旅したのだから・・・。

「夏美綺麗～。ほら見て由佳。夏美お姉ちゃん綺麗だね～」少し離れた場所から、由佳を抱き、知美は夏美を見つめていた。由佳は夏美の存在に気が付いたらしく、手足をバタつかせて夏美の元に行こうとする。

「だめ、由佳～。夏美お姉ちゃんのせつかくのウェディングドレスが、誰かさんのよだれで、ぐちよぐちよになっちゃうから～」

「だあ～」とただ一言発して、どうも理解してないらしく、手で動き回る。

二人のやりとりに夏美が気付き微笑みながら、近づいてきた。

「ごめんね～。夏美～。うるさいでしょこの子、どうも光るものに目がないらしくて・・・誰に似たんだか・・・（笑）」首にかかっている、装飾豊かなダイヤのネックレスに目を奪われる。

「本当はウェディングドレス着る予定じゃ無かったんだけど、智一がうるさくって」

「似合ってる、似合ってる、美人がより引き立ってるわよ」

「ありがと。さあ由佳ちゃん、おいで」抱え上げようと両手を前に出す。

「駄目、駄目、せつかくの衣装が、汚れちゃうから、ほら、ほら夏美、智一君呼んでるわよ」

由佳を手にしているため顎で合図する。

「今度は誰に挨拶するのやら・・・。挨拶ばかりで、疲れました」すこしうなだれながら呟く。

「さてと、ご主人様の面子を守りに行くとしますか～。ごめんね知美ゆっくり話せなくて、また後で来るから待ってて」そう告げ、夏美が歩きにくそうに、横を通り過ぎて行く。

その刹那、夏美が横を通り過ぎるイメージと潤一郎が重なりとっさ

に声を上げた。

「あゝっ、大事な事忘れてた、夏美。さっき、潤一郎君来てたわよ」

「うそ・・・」と振り返りながらただ一言だけ、静かに夏美が囁いた。

「彼女に渡し、転生を選びます」老人を見つめながら囁いた。

「うむ・・・」一言述べた後。

老人が、背広の上着の内ポケットから分厚い懐中時計を取り出す。変わった形の時計で、一段目の文字盤には、現在の『現』の文字が刻まれている。二段目は過去の『過』、そして最後は未来の『未』。3つの時計が重なって一つの時計だと、いつだったか説明を受けた。

『現』の時計を老人が読み上げる。

「後12分30秒、29...28、時間がない、暗闇を解くぞい」

「お願いします」告げたと同時に暗闇と老人の姿が消えた。

あの時、『レラシロス』の曲で夏美に出会い、夏美と時を共有するうち、僕はいつしか夏美を受け入れる事が出来なくなった・・・。僕は僕であり、夏美は夏美、個々固有の人格であり、『僕の歩むべき人生の道と、夏美の歩むべき人生の道はあまりにもかけ離れて違うのではないかと、いつしか考える様になった・・・』

若かりし考えだったのかもしれない、考えたのちに夏美に一つの選

択を述べる結果となつてしまつた……。

人の愛情の温もり、人の支えのありがたさ、そして何より、人を愛する純粋な気持ち。全てを踏みにじむ、酷い選択だったのかも知れない。

過去を改めて旅した上で、今、伝えようと思う。あの時の別れの決断を謝り……。

幸せな時間をありがとうと……。そして幸せになるようにと……。

暗く長いトンネルを抜けた後、僕の目の前に老人が立っていた、そして僕にこう告げたんだ。

「若者よ、残念ながら、若き命の灯火がたつた今消え去つた」とただ一言。

それに対し自分の考えを力強く率直に述べた。

「言っている事が良く理解出来ない、長いトンネルを抜けてきただけで、なぜ死なないといけない？ 現にこうして貴方と話しているし……、それに僕にはまだやり残した事がある、理解出来るように話して欲しい」両手に力を入れる。

「どうして、人という生き物は、生への執着が強い生き物なのだろうか」老人が叫ぶ。

「生への執着？ 当たり前だ！ 僕はまだ生きている。現にこうして貴方と話している、貴方も生きているのではないのですか？」。怒りで声が震える。

「私はとうに人ではない、若者よ」

「人ではない？ 何を言っているのか分かりません、では私の目に居る老人は誰なのですか？」

「私の姿が見えるのか？ 若者よ」

「ええ、はつきりと、老人の貴方の姿が見えます」断言する。すると老人はこう言った。目にうつすらと涙を浮かべながら。

「わしを知っている者を長らく探しておったようじゃ。わしが長い年月ここに、おったのは・・・そうじゃ！！。わしの名を知るものを探しておったのじゃ。もう会えないものと、しかしこうして会うことが出来た、この世界では時の流れにより、記憶、想い出、全てを忘れてしまう悲しい世界、むろん自分が昔は人間だった事も、どんな姿であつたのかも、忘れてしまふ」と静かに語り、そして頬を、一筋の涙が流れた・・・。

「さあわしの名を覚えてくれ」老人が叫ぶ。

僕は無言で首を振った。そして一言「分からない」と静かに老人に告げた。

僕は自分の身に何が起こったのか、どうしてここに居るのか？

そして目の前の老人は一体誰なのか？もちろん会った事もなければ知るよしもない。

とにかく、分からないことだらけで、自然に眉間にしわが寄っていた。

考えることが多すぎて上手く言葉に出来ず、戸惑っている僕を無視し、老人は涙を拭った後。静かに語り始めた。

「思い出せないと言うならば仕方無い、わしを思い出すまで着いて行くのみじゃ、この世界の仕組みから、まずは覚えている限り順番に話そう。分からぬことばかりで、頭が混乱していると思うが。これから、お主がやるべき事を話そう。今生きておる者『現世（現在）』と呼ばれる所にあるものに、自分が生きたということを認識してもらわないと、転生つまりは生まれ変わることはできぬ。それがこの世界の決め事じゃ」

とつさに言葉が出た。

「ちよつと待つてよ、良く分らない？ 僕は死んだという自覚もないし、どうやって自分自身死んだのかも分らない。これは夢で、目が覚めるといつもの朝がやってくるはず、そうに決まってる」自分自身に言い聞かせ、老人を見る。

しかし老人は何も答えることはなく、ただ先を続ける。

「この世界の仕組みや決め事、誰が決めたかはとうに忘れてしまつたわい。この世界にしばらく居ると自分の名も、何もかもいつかは忘れてしまふ、現にわしは名も忘れ、なぜここで、お前さんを待っていたのかも記憶しておらん。『現世（現在）』において誰かに認識してもらわなければ、わしのように迷い人となり、彷徨の運命を辿ることとなるのじゃ」

老人の言葉をゆっくりと理解しようと少し時間をくれるように老人に頼んだ。

考えながら、いつしか言葉を発していた。

「つまり『僕』は死んでしまつてて、転生に必要なことは『僕が生きたということ』を相手に認識させること」それしか方法は無い、ということ」

「そうじゃ、簡単に言つと、生きている者への最初で最後のメッセージじゃ。」

そのメッセージとは言葉ではない、一つだけ自分の物を、限られた時間内に相手に渡さなければならぬ……。それが転生の合図であり、この世界の掟である。その物を渡さなければ、転生することとは無論無理である。誰に何を渡したいかは良く考えることじゃ」

そう言うと老人は背広の内ポケットから分厚い時計を取り出した。
「ラスト・プレゼント・・・」。文字が頭で形成され、言葉となり
無意識に、ぼそりと僕の口をつく、老人の耳には僕の言葉は届いて
いないようであり、勝手に話を続ける。

「『過去』。『現在』。そして『未来』。この3種類で『時』は作
られる。『過去』とは、つまり一度過ぎ去った『時』の象徴。この
『過』の時計により、行きたいと願う『時』の指定を行い、『過去』
から『現在』へと一つだけ自分の物を探す旅へ旅立たなければなら
ない。

そして『過去』の時を歩む中で、お主が最後に自分自身の死を見届
けた時、この時計『現在』と『未来』の時が同時に動き出す。そう
静かに告げ。『現在』と『未来』の時計を僕に見せた、その時計に
は針等は付いておらず『現』と『未』の文字だけが文字盤に描かれ
てあった。

そして老人は『過』の時計つまりは『過去』へと行けるという時計
を僕に手渡した。

「『現在』と『未来』に関しては、そのうち語るとしよう、この3
種類の時計はお主が生きた『時』の証じゃ。本当は1人で時の歩み
へと旅立たねばならぬが、わしの名前をまだ思い出しておらんこと
と、わしの姿が見えることに非常に興味がある、よってお主の時の
歩みにわしも同行するでしょう」

そして老人は『現』と『未』の時計を再び背広のポケットに入れた。

全ての話しが納得できないまま、夢だと思って、試しに日付を夏美
に始めて出会った学園祭に合わせてみようと思った。夢でもいいか
らもう一度だけでも逢えるならば・・・。

どうして日付を覚えていたかつて？

それは出会ったその日が彼女の誕生日だったから・・・。

そして僕は『過去』という時を歩む旅人となった、老人と共に。

夏美に早く逢いたいという気持ちと裏腹に、もし本当に自分が死んでしまっていたらという恐怖の気持ちと葛藤しつつ……。時計の日付を合わせた。

3 楽章 〽曲そして指輪〽

彼女の誕生日に日付を設定した後、老人が囁く。

「この『時』で間違いないのじゃな？」

「ええ、今から五年前の1999年11月21日に……」

「一度その場に行ってしまったら『過去』の『時』はそれより後に戻すことは出来んからな、設定したその『時』がスタート地点じゃ。その地点から川の流れのように『現在』まで流れ、そして『未来』へと時は流れていく。忘れてはならぬぞ、お主が一度過ぎ去った『時』の中でやらねばならぬことを……」

「それでは、参るぞい、心の準備は良いかな？」そう言ったのち、僕の目の前にいたはずの老人が目の前から突然消え。僕は一瞬の出来事で驚き、左右を見た後、すぐさま後ろを振り返った。

老人は僕の後ろに立っており、右手の手のひらを僕の胸の高さまでゆつくりと持ち上げる。老人の広げた手のひらに僕は目を奪われ、無意識に見つめた。

その瞬間、手のひらから閃光が発せられた。僕はあまりの眩しさに目が眩み、反射的に目を閉じ、閃光の光を手で防ごうとした、まともにも光を見てしまい、僕の目の中に白い光の玉が現れ、その玉が消えた後、何度か瞬きを繰り返し、頭を振ったのち、ようやく閉じた目を開けることが出来た。

目を開け、僕の体全身が光に包まれていることに気付く、何処からか「ブーン」という、耳慣れない低音と共に、僕の足の先が消えていく。「あつ」と声を発する事もないまま、体全てが消えてしまった。

辺りは暗闇で何も無く、声だけが何処からか聞こえる。

「そうじゃ、伝えるのを忘れておった、相手には5年後の『未来』

のお主の姿は見えん、

『過去』から『現在』へと時間を早めて進むことは可能じゃが、もう一度言う、一度動き始めた『過去』の『時』は後戻りは出来んかな、相手に何を渡すか？ 渡すものを今のうち決めておくことじゃ。タイムミリットはおぬしが死ぬ時まで、それと『過』の時計は持つておるな、この世界に来た事で、新たなものが時計に加わっているはずじゃ、それとも一つ、『現在』の時に持つて行くものが決まった場合、わしを呼びなさい、その時、現在の『現』と、未来の『未』の時計をお主に渡そう」

そう老人が告げ暗闇が解けたのち、この日が1999年11月21日であり、半信半疑であった自分自身の死というものを、受け入れないといけない場面に出くわすこととなった・・・。

目の前にグランドピアノがあり、たどたどしくも、曲を奏でている一人の女性の姿が見える。

鍵盤の上で細い指が舞う、曲が進んでは止まり、進んでは止まり、つまずいたのち。

教室の扉が開き、『過去』の自分がそこに立っていた。

人は死ぬ時に過去が「ソウマトウ」に流れるという。今がその時であり、空気の匂いや太陽の暖かさまでも、全てがああの時のままであり、今いる場所はやはり一度過ぎ去った『過去』であり、本当に死んだのでは？と自問自答していた。

風が教室に舞い込み風に乘って一枚の楽譜が『過去』の僕の足元に舞い降りた。

「あつ」僕に気づき夏美が、声を漏らした。

若かりし夏美との出会いであり、自分自身との出会いだった。

「すいません、ピアノの音が聞こえたものですから、勝手に入って

しまいました」

答えながら楽譜を渡そうと歩み出す。

「いえ。気にしないで下さい。趣味で弾いているだけですから。私の方こそ、誰かに聴かせたこととか無いものですから、下手ですいません。何か恥ずかしいな」

少しずつ目が慣れて輪郭が浮かび上がる。

「ここ光が強くて眩しいでしょ。ちょっと待ってて下さいね。今カーテンしますから」

そう言つてカーテンを引いてくれた。室内に注がれていた光が一気に遮断され一瞬目が眩んだ。

室内の明かりに目が慣れてくると同時に、彼女に質問を投げかける事にした。

「誰の曲なんですか？」

「今弾いていたのは、歴史上に名前を残すことのなかった人の曲です」

「歴史上に名前を残すことのなかった人……？」

「そう、レラシロスです」小さく呟く。

僕は『過去』の自分と夏美とのやり取りの中で、何度も夏美に触れようとしたし、呼びかけもした、けれど夏美にもむろん『過去』の自分にも本当に見えていないらしく、幾度の呼びかけに対し夏美もむろん、『過去』の自分も答えることは無かった。

まるで映画の一部分を観ているような変な感覚にとらわれ、色褪せないあの秋の日が眩しかった。

智一が慌てて後を追いかけてきて途中で見失つたらしく「潤一郎」と叫んでいる声が耳に届いたが僕は楽譜が見たく、話を進めること

にした。

「楽譜良ければ少し見せて頂いてよろしいですか？」風に舞った一枚の楽譜を手渡すと同時に聞いてみた。

「ええ、構いませんよ、それじゃあ、この曲弾いて聴かせて頂けるなら」そう言つて笑いながら、全ての楽譜を僕に渡し席を空けてくれた。

たぶん僕の外見から判断して、ピアノを弾くようには見えず、冗談っぽく言つたに違いなかった。

『過去』の僕は椅子に腰掛けたのち、最初から最後まで計7枚の楽譜を目で追い、頭の中にある音程領域を駆使し、頭で音を奏でる。テンポを取り、音の強弱を付け、そして旋律の美しさを崩さない様にも慎重に一枚、二枚と楽譜をめくつて行く。

そして7枚目まで見終わると、静かに目を閉じ意識を集中させる。

辺りが静まりかえる。鍵盤に両手を置き。息を吸いこみ、指先に全神経を集中させる。

最初の音を奏でると同時に、辺りの張り詰めた空気が解けた。

過去の『僕』が演奏を始めたのち、老人の声が耳に響く。

「この曲、あの憎き男の曲がなぜにここにあるのじゃ？あの憎きレラシロス。この曲の旋律によりわしの記憶が少しずつ今戻りつつあるようじゃ。頭が酷く割れそうじゃ、頼む『時』を少し早めてくれ『過』の時計の日付を設定したボタンの下に、赤と青の二つのボタンがあるはずじゃ、赤のボタンを押し少し場面を進めて、青のボタンで止めてくれればよい、すまぬが少し進めてくれるか？」

僕は、尋常でない苦しむ声に言われたまま、意を決して赤のボタンを押すことにした。

昔の自分が奏でる曲をもう少し聴きたいと思いつつ……。

『過』の時計の赤のボタンを押した瞬間場面がビデオの早送りのように進んでいく。

過去の僕が、ピアノの曲を弾き終わった所で、青のボタンを押した。すると先ほどの時の流れに戻り、夏美の声が聞こえてきた。

「すごい・・・、一度楽譜見ただけで弾けるなんて」

夏美が言葉の続きを発しようと口を開きかけた時。

「やっと見つけた」。いきなり居なくなるなつつうの、ピアノ聞こえたからまさかと思って来てみたらやっぱりだ」智一が口を尖らせながら一気に喋る。

僕は頭を少しかきながら、「ごめん」と笑いながら呟く。

「いつもピアノの曲が聞こえたら、ふら」と居なくなるんだから」言いながら、夏美に気がついたらしく、「誰？」というような視線を僕に向ける。

僕はとつさに、「え」と、ここで最初にピアノを弾いてた」

「あつ私、高倉 夏美です。ここのT大学の2年です」言いながら微笑む。

「俺らと同じじゃん、なつ、潤一郎、俺ら、S大の同じく2年」そう言ったのち

「俺は平田 智一、そしてこっちが」

「須賀 潤一郎です」

「S大ってたしか音大ですよ？ それでピアノお上手なんですね、ビックリしました」

僕は少し照れくさく、頭をかいた。

「潤一郎、みんな待ってる、もう行かないと」智一が切り出す。

「ああ、そうだった、どうも楽譜ありがとうございました」そう言つて椅子から立ち上がり楽譜を手渡した。

「こちらこそ、素晴らしい演奏を聴かせて頂きました」軽く一礼して笑顔で微笑み

彼女は何かに気が付いた表情で、ふと腕時計を見ながら声を発する。
「やばい、もうこんな時間、知美に怒られちゃう、早く行かないと、それじゃまた校内で会つかもしれないですね、後で帰って来てピアノ片付けますから、このままにしておいて下さい」と言ったのちバタバタと足早に教室を立ち去って行った。

僕と智一は教室に残されたまま、「なんか面白い子だなあ」と僕は智一に言い。

智一は「ピアノ片付けてから行こうか？」とピアノを指差して言った。

「ああ。あの娘は、このままでもって言ったけれど、このままじゃ帰れないし、そうしよう」そう言い。二人でピアノを片付けて、その場を後にすることにした。ピアノを片付け、最後に僕は開け放たれた窓を閉め、教室の入り口へと歩みだし、ふと足を止めた。床に落ちている光る物が視界に入り、それを拾い上げ手に取った。

「指輪？」一人で呟き、先程の彼女の落し物かもしれないと思い、校内で会った時に手渡そうとズボンのポケットに入れることにした。

「あの指輪はエリスの指輪じゃ。間違いない。曲といい、エリスの指輪まで……。まるで導かれるように、おぬしの過去にまわりついておるのはなぜじゃ？」

懐かしさに浸っているのとは裏腹に老人の声が後ろから聴こえてきた。

僕は振り返り。

「エリスの指輪？現にあの指輪がそういう名の人の指輪だというのもしらないし、曲といい指輪といい、これは僕の一度過ぎ去った過去であり、どうして曲と指輪がまわりついている？と言われても

分らない、貴方はどうしてそれほどまでに歴史に名も残っていない人の事を詳しいのですか？」声が聞こえる方向に向かい答えを待った。

「全てはあの憎き、レラ」シロスの事・・・なぜに今まで忘れておったのじゃろうか？わしの可愛いエリスの一生を台無しにしたあの男のことを・・・許せぬあの男のことを・・・」

そして老人は静かに語り始めた、指輪そして・・・レラ」シロスの人物のことを・・・。

- 4 楽章 - く祖母の語らい

教室を飛び出し、走り始めた後、祖母の言葉が頭に浮んだ。

【この曲にはねえ夏美、古より伝わる伝説みたいなものがあるらしいんだよ、おじいちゃん余命3ヶ月とお医者さんに言われて、いつの日だったか、急に体が動くうちに旅行に行こうと言い出してね。最後の旅行だつて分かつてはいたんだけど楽しかったわ。ローマ、パリ、イタリア……。世界各国を旅して、夏美へのお土産、今となつては何処の国で買ったかはつきり覚えてないんだけど……。唯一覚えてるのは、ある国で、通りすがりの小さな骨董品屋におじいちゃんが入っていったね。夏美が好きそうな物を探そうと私に言いながら、お店に入ることにしたの。

店内を見ていた時にね、急に「おおこれじゃ、これじゃ、これを探しておつた」

つて子供みたいな笑顔で嬉しそうに額に入った楽譜を手を取ったんだよ。

私は、ほこりまみれで良く見えなかったから、最初は絵かなあーとも思つて覗き込んだんだけどね、おじいちゃんがほこりを払い除けると、そこには音符が書かれていてね。

すぐに「これはいくら？」つて大きな声を発して店員さんと呼んだわ。

すると、奥から大柄なヒゲを生やした男の人が出てきて、「いらつしやい」つて一言。

そしておじいちゃんの手にしてるものを見て。

「すまない、それは売り物じゃないんだ、店のアートとして置いている物だから、それはどうしても譲れないねえ。他のじゃ駄目かい？それにしてもお客さん、流調な英語だね、どこの国からかい？」。そしたらおじいちゃん嬉しそうに笑顔でこう返したらしいんだよ。

「ありがとう、この店も、話しに聞いた通り洒落た感じの店だね。

私は旅行が好きで友人からこの店のことを聞いて日本から訪ねてきたのさ、旅行する内に英語も流調になってね」店の主人は「そんなに、遠い所からわざわざこんな店に来てくれたんだ、どうもありがとう」って、すごい笑顔で言って、わざわざ奥から出てきておじいちゃんに抱きついて大きな声で笑ってた。

後からあの時、「わしに抱きついて、言ってたことはこんな意味じゃ」って教えてくれたんだけどね。

それから何度か会話をする内に二人とも「ケンゾー」、「ルディ」って、呼び合う様になってて、私は英語ちつとも分かんないから、何を話しているのかさっぱりだったけど。

急におじいちゃんが「ばあさん、ルディが、今からすぐに店を閉めるから食事に行こうと言っておるけど、どうじゃ？行くかい？」って聞いててきたんだよ。

だから私は「そうねえ、今日は食事する場所も決めてないし、ルディさんにお任せしましょうか」って告げたわ。そして、3人で、ルディさんの行きつけの店で食事をとることにしたんだよ。

お店に着くなり、「リッツ。人数分のビールと、食べ物は何種類かよろしく頼むよ、お任せで」

そうルディは大声でお店のマスターに告げて、席に着くなりおじいちゃんにこう言ったらしいの。

「ここリッツの店の料理は格別だよケンゾー。口に合えばいいけれど。ああそれはそうと、さっき聞こうと思ったんだが、どうして君は、あの楽譜を買おうとしたんだい？あの楽譜は、昔から、この地方に伝わる、おとぎ話みたいなものがあって、もしかしたらその話に出てくる楽譜かもしれないんだよ、真相は、はっきりとは判らないんだが、親父から店を継ぐ、その前の俺が子供の時から、あの縁に入ってて、昔はよく親父からその話を聞かされ続けたもんだよ」そう告げると同時にたくさんの料理と、ビールが運ばれてきてね。料理の量に圧倒されてる私達二人を笑顔で見つめながら、あつという間に、目の前に置いてあった瓶ビールをルディは空にしたわ。私

の第一印象は、大きい声で笑う人、あとは勢いよく、ビール飲む人だったわね。

「あの楽譜を買おうとしたのは、ピアノを弾く孫がいてね、その娘のお土産にと思って古い楽譜を探していたのさ、ところで、ルディそのおとぎ話とはどういう話なんだい？」

おじいちゃんは、興味があるらしくすぐに目を輝かせて聞き返した。

「ばあさん、ルディの店にあった楽譜、この地方に伝わる、おとぎ話の物かもしれないんじゃと、ルディに話を聞いた後ゆっくり話してやるから、ちょっと待ってなさい」

そう私に告げて、「さあルディ、ぜひ話してみてくれ」っておじいちゃんは告げたの。

少年みたいな眼差しでルディを見つめていたわ。

「子供の頃に聞いた話で、随分時間が経っているが、記憶を辿ってみるとしよう」

そしてルディはゆっくりと話し始めたの。

「その昔、満月が水面に漂う時刻、ある湖で命を絶とうと、若い女性湖の中心に向かって静かに歩いておった。胸元まで水に浸かり、一歩また一歩とゆっくり、ゆっくりと歩いていく、ついに口元まで水が押し寄せた時、何処からか大きな声がかかった。

『その者、立ち止まられよ、そこまで思いつめ、行動に移すという事は、意を決してのことと思われる、しかし、私も同じ女として見て見ぬふりは出来ぬ、まずは立ち止まられよ』　すると湖に身を投げる寸前の女性は、一度立ち止まり、声のする方へと顔を向けた。その頬は涙で濡れ、顔には疲れが色濃く現れていたという。

声をかけたのは馬に乗っている女性で、全身を隠すような黒の服装であり、明かりは月明かりしかない、黒の衣装と闇とが同化し、姿、顔立ちは良く見えない。

あっという間に湖の淵まで馬を寄せ、何のためらいも無く湖の中に

入り、命を絶とうとする女性へと向かい一歩、また一歩と歩みを速める。そして、あと少しで女性へと手が届くという距離になり声を掛けた。

『どうされた？どうしてこのような形で命を無駄にする、まずは、岸へと上がろう』

ゆっくりと手を伸ばしたが、抵抗のきざしが見え、『かまわないで――』そう叫び、暴れながら、すかさず前を歩もうとする、その瞬間、馬上の女性は後ろから手を取り、強引に岸边まで連れ戻った。

石畳に座らせ、馬上より毛布を取り、体を包む。

『さあ話してみなさい、必ず力になれるはずだから』そして彼女は泣きながらゆっくりと話し始めた、生い立ち、なぜに命を絶とうとしたかを……。

一通り話を聞き終えたのち、女性は、懐から一の指輪を取り出した。『この指輪は「嘆きの指輪」と呼ばれる物、貴方の嘆き悲しむその気持ちを指輪が吸い取り悲しみを和らげてくれる。別名「エリスの指輪」というもの。さあはめて楽になりなさい』そう告げ彼女に指輪を手渡した。彼女は何のためらいもなく、静かに指輪をはめる。

そのとたん目の前にいた馬上の女性はその指輪へと吸い込まれ、目の前から消えた……。

そして指輪を扱いながらこう言ったという。

微笑みを浮かべ『やっとな新しい身体へ乗り移ることが出来た』と。

自ら命を絶とうとする女性の前に現れてはな、次から次へと体に乗っ取る『魔女』として伝説になっているんじゃないと。乗っ取った体が歳をとると、交換するらしい。

でもな、この話には続きがあるらしく、体に乗っ取っても手に入れない物があつたんじゃないと、それがルディの店に置いてあつた楽譜だそうだと。何故に楽譜を欲しがつたかつて？

愛した人の形見の品がそれしか無かつたらしい。肌身離さず大事に保管していたはずが、ある時消え去り、楽譜を探す旅に出たが、旅に慣れていなかったせい、短命にこの世を去ってしまったという。

この世に未練を残しつつ、悔いだけが残り思念が指輪へと乗り移った形だという、その後どうなったかは分からないらしい、楽譜を手に入れる事が出来たのかどうかも……」

『自ら命を絶とうとすると魔女が現れる』この言葉だけがこの地方に残っているんじゃないかと。

「わしは未練などないから大丈夫じゃ」。私を見て笑ってた、おじいちゃん死期が近かったのに……。

「私は死んだとしても未練は無い」と、英語でルデイに伝えてたよ。ルデイは「ケンゾーは、元気そうだし、大丈夫、長生き出来るよ」そう言つて、優しい笑顔で微笑んだ。

そしておじいちゃんは言つたの。

「わしの命は後わずか、最後の思い出作りに旅をしているんだ、医者からは余命3ヶ月と診断されたよ、悪性の腫瘍が全身に転移して手遅れらしい。だからルデイに会うのはたぶんこれが最後だと思うよ」。

頭を抱えながら「おう何てことだ、何かの間違いじゃないのか？信じられない……こんなに元気なのに」

「わしも、嘘だと思いたくないんじやが、服用する薬の数からみても嘘じゃないと思うんじや……」

ポケットから袋を取り出し。その袋に入った何十種類の薬を卓上に広げ、ちよつと寂しげな表情でルデイを見つめて、そして静かに口を開いたわ。

「ルデイに一つ謝らないといけないことがあるんだ、友達で紹介で店に訪ねてきたと言つたが、あれはあの時の思いつきで話してしまったことなんだ、嘘をついて本当にすまない。すまなかつた」頭を下げる。

「そんなことは、どうでもいい、謝らないでケンゾー。君の気の効いた嘘のおいかげでこうやって仲良くなれたんだ。あの嘘はこの友情の為に必要な嘘だつたと思うから」

「友情・・・ほんの少し時間を過ごしただけでも、ましてや歳が離れていても、友と呼んでくれるのか・・・ありがとう」ルディは笑顔で優しく頷いて、「ああその通りさ。俺の大事な友人さ。もしかしたら、あの楽譜がケンゾーを呼び寄せたのかもしれないからね。俺の親父が良く言ってた言葉があるんだ。人とのめぐり合いを大切にしないさい、運命というものは、幾多のめぐり合いが重なり、その出会いが鍵となって、運命という名の大輪が廻り始めるのかもしれない、だから、出会いを素直に受け入れる、心の広さを持ちなさいとね」

「素晴らしい考え方じゃ、通りでわしとも、すぐに打ち解けたんじやな」

おじいちゃんが、すぐに日本語に訳して話してくれて、私も素晴らしい考え方だと思ったわ。それから楽しい話で盛り上がって、笑顔が耐えなかった。話に夢中で、卓上に広げた薬をみんな忘れててね、後で慌てて袋へと戻したんだよ。

そしてちょうどその時、ルディの腕時計をおじいちゃんが何気に見たの。夜中の12時近くだったかな？

「ルディ、そろそろ行かないと・・・。楽しくて時間を忘れてた。今日はどうもありがとう、料理もすごく美味しく、色濃い時間を過ごすことが出来たよ」そして日本語で「ありがとう」っておじいちゃんは告げたの。するとルディも「ありがとう」って真似して発音してた。二人共が、自然に握手を求めて、力強く握手を交わしたの。

店を後にして、歩きながら、ルディが「いつまで、ここに滞在するつもり？」って聞いてきたらしいわ、おじいちゃんは「明日の朝には次の国へと旅立つつもりじゃ」って返したんだって。

すると「もう行ってしまうのか？会えなくなるのはとても辛いな・・・」。

そうだ！出会えた記念に、ケンゾーが欲しがってたあの楽譜を渡そう、楽譜はあっても俺は楽器は弾けないし、あれを見るたびに、ケ

ンゾーとタカコを思い出して、すぐにも店を、ほったらかしにして会いに行ってしまうそうだから……。そしてケンゾー。いつの日かあの曲を聴かせて欲しい。それまでは元気でいて欲しい」ルディは願いをかけるように話してた。

「ばあさん明日旅立つ前にルディに店に寄ってもいいかい？あの楽譜を譲ってくれるらしい」私は頷いて「そしたら明日立ち寄ってから、行くとしましょう」

私の返答をおじいちゃんが、ルディに告げたとき、ちょうどホテルの目の前で。

「ケンゾー、タカコ、ホテルはここだね？今日はとても楽しかった。俺は向こう側が家だから、ここでお別れしよう、明日お店で待ってるから」そう言っておじいちゃんに抱きつき、それから私に抱きついて、挨拶を交わしたの。おじいちゃんと私は「それじゃまた明日」そう言っておじいちゃんの手を振ったの。あの時、おじいちゃんと別れるの、本当に寂しかった。

そして次の日の朝、旅支度を済ませてからお店へと向かったの。お店の入り口のドアを開けると、ルディは笑顔で待ってた。

「これをお孫さんに」そう言っておじいちゃんが今手に持っているそれを渡してくれたの。

「楽曲名は不明で、作曲者はレラ・シロスって人なんだって、ほらそこ、小さいけど名前らしいものあるでしょ？たぶん世界にこの曲しか残ってなくて、歴史上に名前すら出てこないし、誰もその曲も聞いたことがない。これまでに演奏した人がいたのか居なかったのか？」

それすらも分からないんだって、ルディの家系は音楽をかじった人も居なかったらしいし、誰も楽譜には興味が無かったらしいわ。楽譜を粗末に扱うことだけを禁じられて、額縁を開けたこともないんだって、だから何枚楽譜が入っているのかも分からないんだって。おとぎ話自体には興味があったらしいけど、もしかしたら夏美が一

番最初の演奏家なのかもね」】

それから祖母の話によると、ルディと別れを惜しみつつ、国から国へ三つ程旅し、一度祖国へ帰ろうという話になったらしい。

日本に帰り着いてその晩、二人にいろんな話を聞かせてもらい。話し終えた後、「少し疲れたから横になろうかのう、夏美いつかその曲を聴かせてくれなあ」これが祖父の最後の言葉となった。眠るように息をひきとり、まるで自分の死期に合わせて帰国の途に着いた様だった。苦しみことなく安らかな永眠であった。

身内が亡くなったことが初めてで、ショックで一時は楽譜の存在すらも忘れていたけど。

泣いてばかりの落ち込む私に対して、祖母の一言が私を変えた。

「ショックで落ち込むのも分かるけど、おじいちゃんの聴きたがってた、あの曲を完成させなさい、それが一番おじいちゃん喜ぶことだと思うから」

そして私は額縁を開け、楽譜を取り出し、書き写す作業から始めた。所々、薄れてはいるものの、保存状態がよく、すべての音符を無事に書き写すことが出来た。

それから、もう一度、額縁を綺麗に閉じ、部屋の壁に掛けることにした。

書き写している時、ピアノの楽譜であることに気付き、早く音として表現したい衝動に駆られた。そして今日まで、時間の合間を見つけてはピアノに向かい練習に時間を費やすこととなった。

（おじいちゃん聴こえたかな？あとルディさん。弾いたのは私じゃないけど、素晴らしい曲だったよ。いつか必ずおじいちゃんの為に弾くからね。それまで待っててね。）

知美の元へと走りながら、あんな変則的な楽曲を一度見ただけで弾

ける。

あの人にもう一度会いたい。もう一度、奏でる音色にふれてみたい、夏美はそう思うようになっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3447a/>

蛭樹

2010年10月11日13時23分発行